

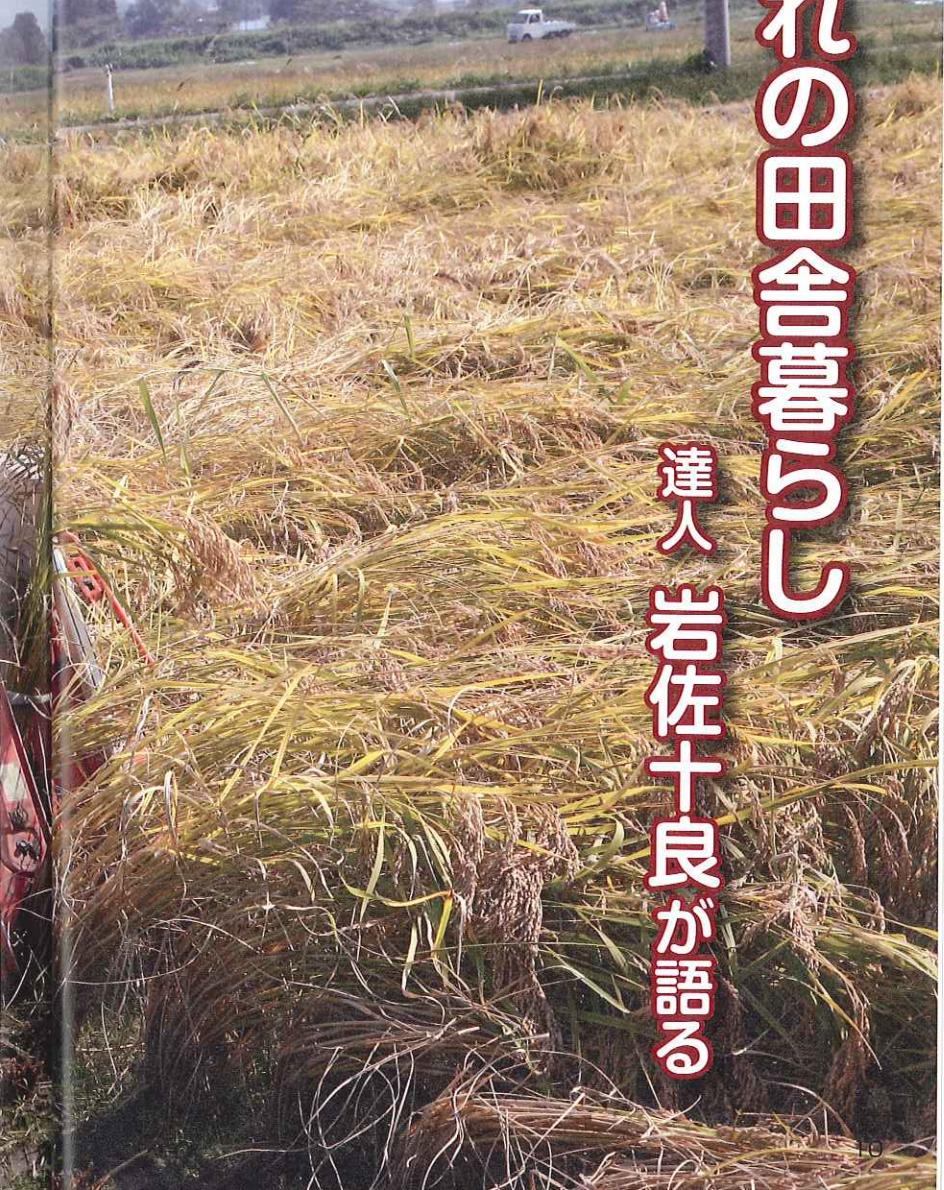
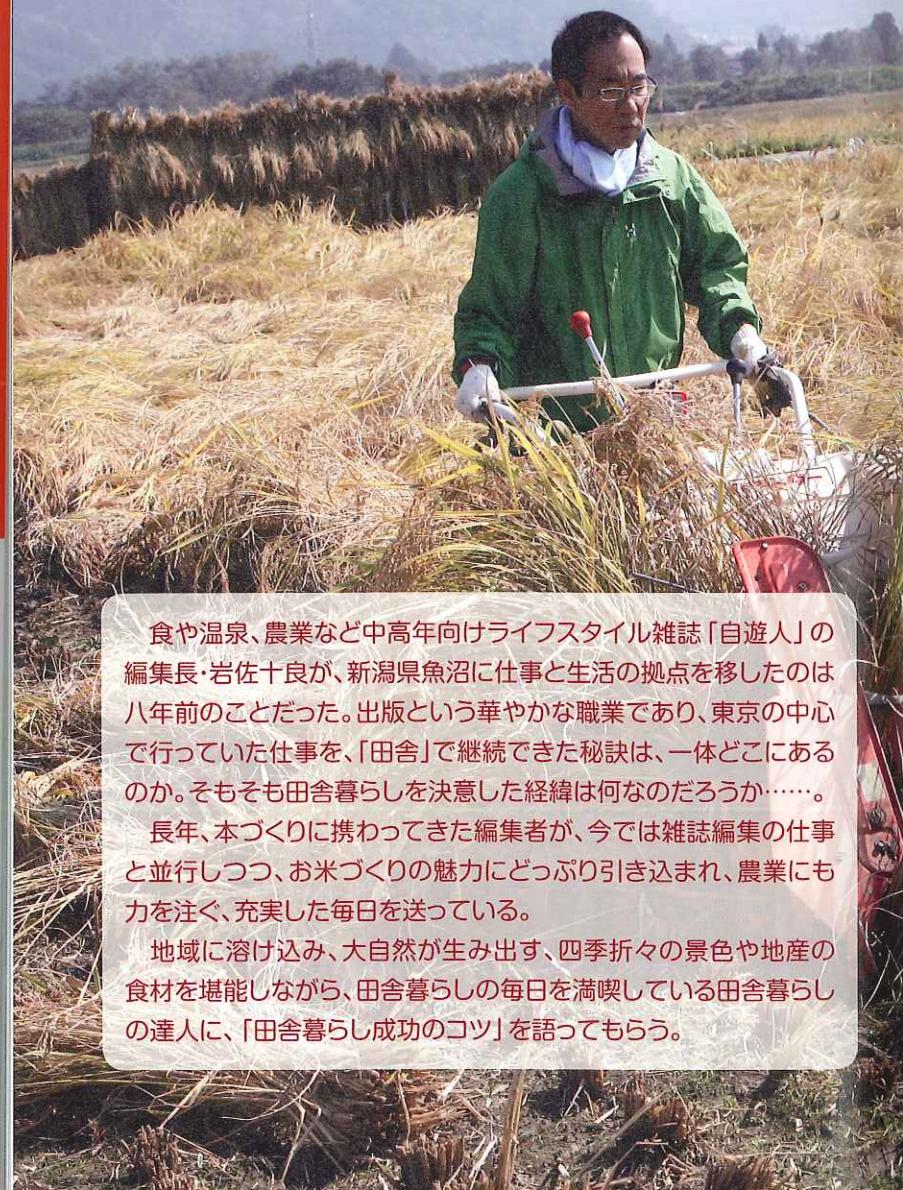
# 憧れの田舎暮らし

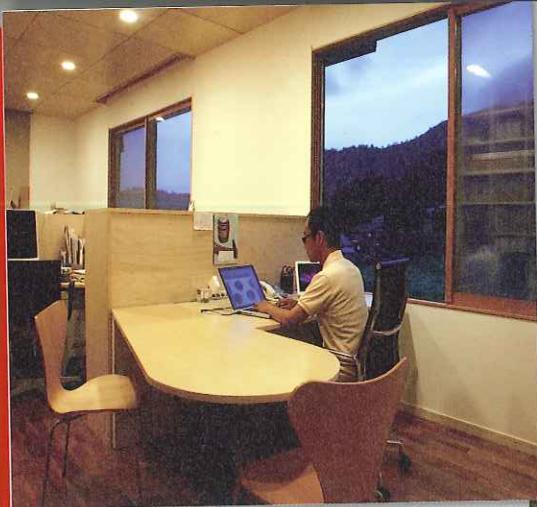
達人 岩佐十良が語る

食や温泉、農業など中高年向けライフスタイル雑誌「自遊人」の編集長・岩佐十良が、新潟県魚沼に仕事と生活の拠点を移したのは八年前のことだった。出版という華やかな職業であり、東京の中心で行っていた仕事を、「田舎」で継続できた秘訣は、一体どこにあるのか。そもそも田舎暮らしを決意した経緯は何なのだろうか……。

長年、本づくりに携わってきた編集者が、今では雑誌編集の仕事と並行しつつ、お米づくりの魅力にどっぷり引き込まれ、農業にも力を注ぐ、充実した毎日を送っている。

地域に溶け込み、大自然が生み出す、四季折々の景色や地産の食材を堪能しながら、田舎暮らしの毎日を満喫している田舎暮らしの達人に、「田舎暮らし成功のコツ」を語ってもらう。





オフィスはこだわりの内装で統一。東京の頃と同じように、雑誌編集の仕事ができる。収穫期にはトラクターを操り、お米づくりにも精を出す。



地域の公共施設を改修して作られたオフィス。季節には周辺に虫が舞う、素晴らしい環境。

## 私がはまつてしまつた お米作りの魅力

私は今、新潟県の南魚沼(じぶつ)ところに住んでいます。しかもオフィスがあるのは新潟県のなかでも山沿いの、小さな町のそのまたはずれ。「ほたるの里」という自然公園に面しています。

もともと東京日本橋にあったオフィスを「新潟に移したのは八年前のこと。私たちは「自遊人」という雑誌制作のほかに「日本一!」と自信をもって言える食品ばかりを扱う「オーガニック・エクスプレス」というインターネットショッピングモールを運営しているのですが、その主力商品はお米。日本一の技術を持つ農家や、受賞歴を持つ多くの農家からお米の販売を任せられています。

移住の理由は「お米の」とを学ぶためにでした。けつして私が新潟出身なわけでも、隠居生活を楽しむためだったわけでもありません。しかも最初の予定は二、三年だけだったのですが……米づくりの奥は深いです。

ぐ、しかもあまりに住み心地が快適で、ついに八年目に突入してしまったのです。

実は最初の移住候補地は長野県の軽井沢でした。軽井沢周辺には多くの知り合いがいただけでなく、取引先の有機農家などもあつたのです。

魚沼への移転は、ある農家の「せつかく勉強するならば、魚沼にしたらどう?」と云ふことが決め手になったのですが、すでに全員が軽井沢への移住準備をしていました土壌場での大どんぐん返しでした。多くの従業員が「魚沼なんて嫌ですよ」と反対しましたし、私自身も「二年くらい米づくりを真剣に学んでもいいじゃない」となだめながら、本心は「住むなら軽井沢だなあ」と思っていました。

ところが、では。今では魚沼に移住した全員が「軽井沢より魚沼のほうがいい」「ひだよね」「魚沼の自然は素晴らしい」と本気で言います。軽井沢は今も大好きな町ですが、魚沼はもっと素晴らしいと思うのです。

さて、何が言ひたひのかどうかと云ふと、「魚沼を自